今年度の取り組みを振り返って

龍谷大学・京都産業学センター代表
重本　直利

2014 年度の京都産業学センターとしての主な取り組みを振り返りたいと思います。

まず、11 月に龍谷大学・ベンチャービジネス・シンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、堀場製作所最高顧問の堀場雅夫氏から基調講演（題目「おもしろおかしく」）が行われました。氏は 1945 年 10 月に京都帝国大学理学部物理学科の学生でありつつも下京区内で堀場無線研究所を開設されたベンチャーの草分け的存在です。それから 70 年が経過し、この間、時代・社会は大きく変貌しました。模索を続ける日本における 21 世紀産業・企業のあり方を考える上で、また地域経済の活性化を考える上で、ベンチャーの重要性を再認識しました。講演後のシンポジウムでは、「ベンチャービジネスのまち・京都を実現するために」と題して、京都におけるベンチャーの現況と課題、今後の方策が議論されました。シンポジストには、今庄啓二氏（フューチャーベンチャーキャピタル社長）、辻野貴志氏（サイエンス・グラフィックス社長）、孝本浩基氏（京都高度技術研究所、経営・新事業創出支援本部長）、古川慶一氏（日本経済新聞社京都支局記者）のご参加をいただき、コーディネーターには本センター専門委員の中森孝文氏（龍谷大学政策学部教授）が務めました。大学と地域産業・企業の連携・共同のあり方を含め、ベンチャービジネスの諸課題が明らかになりました。

次に、京都産業学研究シリーズ（ブックレット）企業別研究第二巻『イシダ』の刊行準備です。第一巻の『島津製作所』の続巻です。イシダの全社的なご協力の下、共同研究は精力的に進められました。9 月からは毎月、イシダの方々のご参加を得て共同研究会が進められました。ブクレット冒頭には石田隆英代表取締役社長のメッセージが寄せられています。本共同研究の客員研究員でもあるイシダ総務人事部の中田耕司氏と岸場敏弘氏には多大なご協力を得ました。2002 年の本センター設立当初からの取り組みであったイシダ研究がようやくブックレットとして刊行されたことを喜びたいと思います。

第三は、１月に第 24 回京都工芸サロンが「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」施行 40 周年記念の特別サロンとして開催されました。テーマは「伝統産業振興のパラダイム転換―今後必要とされる取り組みとは何か―」

です。講演者として若林卯兵衛氏（若林佛具製作所・取締役相談役）、八田誠治氏（京都伝統産業交流センター・専務理事）をお迎えしました。京都産業学センターは、地域社会連携と共同研究のアプローチから、京都の伝統産業と近・現代産業の２つを位置づけ、取り組みを進めてきました。特に、京都の近・現代産業への展開としての伝統産業のもつ意味を重視してきました。ご講演は、京都の伝統産業における取り組みのあり方に関する刺激的な内容であり、今後求められる取り組みが明らかになりました。

第四は、８月に中小企業家同友会と京都産業学センターとの連携にむけての懇談会が龍谷大学「ともいき荘」でもたれました。京都中小企業家同友会から、代表理事の岩島伸二氏、北村卓也氏、野田勝弘氏の三氏および事務局長の荻原靖氏にご出席いただきました。貴重な意見が出され有意義な場となりました。この場では、インターンシップの取り組みとともに大学との連携においては地域社会における中小企業の存在理由の理解の必要性、個々の教員だけではなく大学としての組織的対応の必要性、今の学生の大企業志向の中で中小企業の良さについての理解の必要性などが話し合われました。

第五は、10 月に龍谷大学図書館長に対し、図書館に所蔵されている「京都商工会議所寄贈図書・資料」についての依頼を行いました。本寄贈図書・資料は、経済学部の佐々木淳先生と本学非常勤講師の北野裕子先生をはじめ専門家の先生方の価値評価をふまえ、引き続き本学が所蔵すべきとの結論に至りました。現在、目録を京都産業学センターとして作成し、京都産業学センターあるいは本学図書館所蔵として区分整理し、その後、移動を完了させるべく取り組んでいます。

第六は、2015 年度前期開講の京カレッジ（大学コンソーシアム京都）において、「京都の産業・企業の経営に学ぶ」と題して、近代京都産業の源流としての島津製作所に関する講座を開くことになりました。既刊の島津ブックレットが教材となります。これもまた地域社会連携の一環です。

上記の他にも、５つの共同研究プロジェクトが地域社会連携の取り組みとして進められました。今後も、京都の産業界、自治体等との地域社会連携を基軸とした研究および教育を進めていきたいと考えています。

最後に、こうした取り組みの中で、ベンチャー・シンポと工芸サロンでは京都市のご後援をいただきました。市役所関係部局の皆さん、特に産業戦略監の白須正氏には多大なご協力をいただきました。あらためて感謝申し上げる次第です。